

鈴木ひとみ

車椅子のウェディングから二年

気分は愛のス。ピードランナー



のウェディングから二年

は愛のス。ヒードランナー

鈴木ひとみ

気分は愛のスピードランナー

1987年 9 月21日初版発行

1999年11月 4 日第 33 刷

著 者 鈴木ひとみ

発行者 河本 達二

発行所 日本テレビ放送網株式会社
東京都千代田区二番町14番地

〒102-8004 電話(03)5275-1111(大代表)

印刷所 図書印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取り替え致します。

©HITOMI SUZUKI

1987 Printed in Japan

ISBN4-8203-8745-6 C0095

気分は愛のスピードランナー 目次

1章

新婚生活は、いそろろ主婦でスタート

5

- 生命あるかぎり死に至るまで
- こんな新婚第一日目の始まりってある？
- ひとみ、ありがとう
- いそろろ主婦
- 車と私
- 伸ちゃん、午前様に変身
- 住宅ローン
- おかあちゃんとお母さん
- その人を見てはだめ
- 車椅子のゆかいな仲間たち
- ダイビングの特訓を開始せよ！
- 一難去って……
- 戻ってきた海
- トイレ、トイレ、トイレ！
- 新婚旅行
- ワイキキの海辺
- ワイアナエ沖のダイビング
- 沈没船探検

2章

新居が出来て本当のオクサンに

63

- 本当のオクサンに
- 関白亭主
- クリステイヌ
- 夫婦生活
- 危険予知能力をみがけ
- 障害者の日
- 歩く夢やぶれる
- なんてこうなるの！
- 味にうるさい伸ちゃん
- “かわいそうな人”を演じたくない
- 新聞読むのやめて
- 伸ちゃんなんかスキーで足を折ればいい
- クリスマス礼拝
- ひとみの今の手が好きだよ

3章

大きくひろげよう、車椅子の暮らし

- 山下さんのお墓参り
- 海の香りのする墓前で
- 二五回目の誕生日
- 失うもの、得るもの
- 雪の新潟講演
- 私のことかドラマに？
- チェアスキー
- 七転び、また転び
- 視聴者からの手紙
- 世界競技大会の選手に

115

4章

せいいっぱい、今を生きよう

- 車椅子になつていなければ
- おしりの傷
- お好み焼きパーティー
- 顔の傷
- ドラマの脚本
- 訓練、訓練、そして日射病
- ドラマの撮影に立ち会う
- テレビの力
- 残り日数ゼロ
- ストーク・マンデビル大会
- “心のメダル”を手に

167

あとがき

220

1章

新婚生活は、

いそろろ主婦でスタート



生命あるかぎり死に至るまで

ベッドの上で私は目を覚ました。家のベッドではない。病院のベッドでもない。ホテルオークラのスイートルームのベッドで。本当に結婚したんだな、と思おうとするけれど、まだ信じられない。

そつと隣を見る。伸ちゃんが眠っている。ずっと伸ちゃんの寝顔を見ているうちに、少しずつ昨日のことがよみがえってきた。一年遅れのウェディング・ベルを鳴らした日、昭和六一年六月一日の一日のことが。

伸ちゃんのご両親が前の晩遅くまでかかって花で飾ってくださった車椅子に乗って、霊南坂教会のバージンロードを進む。ステンドグラスの美しい輝きが不思議なくらい鮮明に目の一角に入ってきた。伸ちゃんに迎えられ、二人並んで祭壇に向かう。そして誓いの言葉。

「……その生命のかぎり、死に至るまで、かたく節操を守ることを誓いますか」

「はい、誓います」

低いけれども、はっきりと伸ちゃんの声が応ずる。

「……その生命のあるかぎり、死に至るまで、かたく節操を守ることを誓いますか」
「……………」

しっかり応じたつもりの方が、つぶやくように小さいのが自分でわかる。大きな声を出すと泣き声になりそうだった。

「生命のあるかぎり、死に至るまで」

この教会で結婚を誓った数多くのカップルにとって、それは厳かな儀式の言葉、この先の長い将来に思いを馳せる言葉だったはず。しかし私たち二人にとっては目の前の現実をえぐられる言葉でもある。

たぶん私は長生きできないだろう、そう思う。頸髄損傷（頸損）の治療の歴史はそれほど古くはない。以前はベッドに寝たまま死を待つ状態だったという。治療が可能になったといっても骨折や脱臼をなおすということであって、神経をつなぐことはできない。麻痺は残るし、合併症も誘発しやすい。

頸損で社会復帰できたとしても、その寿命は長くはないという話も聞いた。これが動かせない現実だということを、伸ちゃんも私もよく知っている。

結婚指輪の交換。伸ちゃんの指が私のヴェールにかかり、静かに上げる。そして励ますようにかすかにほほえみかける。

へこういう体になったことをあれこれ言っても始まらない。足が動かなくても、車椅子になっても、ひとみに変わりはない。できるところまで二人でやってみよう。力が尽きたらそのとき考えればいい〜

以前、結婚を迷っていた私に、伸ちゃんはこう言った。今また、伸ちゃんが無言でそう言うのを感じた。

へ伸ちゃん。ひとみ、生命のあるかぎり頑張ります〜

ホテルオークラでの披露宴は予定より一時間オーバーして夜九時半に終わった。私にとって感銘の深い披露宴だった。

媒酌人、恩師、上司、同僚、友人、どの方のスピーチも心を打つものばかり。話の内容はそれぞれにちがっても、どれも私たち二人を温かくつつみ、励ましてくれる。一年前、予定どおり健常者同士の結婚をしていたら、はたしてこれだけの「心」をもらえただろうか。

披露宴が終わったあと、私は立って列席者のお見送りをした。実際に立てるわけではない。体の両側にバーを置き、それにつかまって全体重を支える。足はぐにやぐにやだから装具をつけて固定している。もちろん、ドレスに隠れて見えないけれども。帰られる一人一人の方におじぎをした。私は腹筋も背筋もきかないため、深く上体を倒すと元に戻せなくなる。頭だけでうなずくようなぎこちないおじぎだったにちがいない。

それでも、私が立っているということだけで皆感激してくれた。涙ぐむ友達もあった。

これまでの私は周囲の人のお世話になるばかり。何もお返しすることができない。せめてもの感謝の気持ちを表すために、お見送りだけでも立ってしたい。そう思いついてから毎日、この日のために立つ訓練をした。はじめは何分もつづかなかった。歯をくいしばり、腕をぶるぶる震わせて、少しずつ時間をのばしていく。そのかいがあった。

最後の方が帰られると、さすがにへとへと。でも気分は最高。

こんな新婚第一日目の始まりつてある？

首の後ろにゾゾーという感じが走った。代償尿意である。おしっこがたまると血圧が上がり、そのため首すじがゾツとするらしい。ゾツとしたときにはもう遅い場合も多い。

へいけない！ 急げ！

ホテルの慣れないベッドから車椅子に乗り移るには時間がかかりそうだった。ベツドを汚したらどうしよう。

「伸ちゃん、伸ちゃん！」

まだ眠っている伸ちゃんの腕をつかんで揺する。ぼんやりと目を開けた伸ちゃんは、私の必死の表情からすぐ状況を察知してくれた。私を背負ってトイレへ一目散。

トイレへ一步入ったとたん、伸ちゃんの背中がおしっこに濡れた。

へわーん、伸ちゃん、ごめんネ

着替えをして、ベッドルームの隣のしやれた居室に移ってから、私はしゅんとしていた。こんな新婚第一日目の始まりであるだろうか。

「さつきは……ゴメンネ。よりによってこんな日に……」

「よりによってこんな日だから、むしろいいじゃないか。一生の記念になるよ。オクサンになったゴアイサツだと思えばいい」

「だってえー」

「だって何もないよ。こんなことでクヨクヨすることはないんだ。ひとみが悪いんじゃないんだから。どうにもならないことにはこだわらない、そうだっただろう？」

「……………」

涙がこぼれそうになる。うつむいて、薬指にはまった結婚指輪を無意識にはずした。いじっているうちにおかしなことに気づいた。

「あれえ。これ、伸ちゃんの指輪や。ほら、見て」

伸ちゃんは一瞬きよんとした。それから自分のしている指輪をはずして、裏に刻んだネームを確かめる。

「指輪交換のとき、牧師さんが取り違えたな」

「同じサイズやから、わからなかったのね」

「夫と同じに指の太い花嫁なんて、そういないからね。あらためて指輪交換といこう」
二人だけの指輪交換をした。私はもう、いつもの陽気な自分に戻っていた。

ひとみ、ありがとう

夕方、阿佐谷の両親の家へ帰った。三月に退院して以来、同居させてもらっているからもう馴染んだ家なのに、玄関に入るとき少し緊張した。何と言えはいいだろう。へただいまでは普段と同じだし、へおじやましますでもおかしい。へごめんくださいではなおへんだ。へお世話になりますは唐突だし。

迷っているうちに奥からお母さんが走るように出て、迎えてくれた。

「お帰りなさい。ごくろうさま。ひとみさん、疲れたでしょう」

いつもと変わらない。ほっと緊張が解ける。

「ただいまあ。もー、疲れました。二次会のあと、お部屋で夜中の二時半まで三次会やっただんです。伸ちゃんたらお友達と一〇人で、ドンチャン騒ぎ！」

屋内用の車椅子に乗りかえる間も話しつづけた。差し入れのシャンペンで乾杯したこと。くたくたに疲れていた私をベッドに入らせて、伸ちゃんたちが隣室で酒盛りを始めたこと。そうとうな騒ぎだったのにもかかわらず、私はたちまち眠ってしまったこと。指輪取り違いのこと。などなど。

夕食には伸ちゃんのおばあさんも入れて一家五人が揃った。結婚式、披露宴の話に話題が集中。お父さんの「お礼の言葉」に話がいったときはおかしかった。

「お父さん、あれは第何番目の音調？ 練習のときにはない高さのようでしたけれど」
「そんなこと聞かれたって……」

お母さんのからかう調子に、お父さんはぐっとつまった。

お父さんは「お礼の言葉」を何度も練習したのだった。練習の仕方が変わっている。高い声・低い声・中ぐらいの声、などと幾種類もの声をテープに吹きこんで家族に聞かせ、どれがいいか選べという。

みんな半分はおもしろがり、半分は真剣に聞いた。結論は、普段の地の声ということになった。

「地の声でちゃんとやったつもりだが……少しはうわずったかもしれないな。そのほうがその、つまり、人間味があるというものさ……」

てれて汗を拭くお父さんの様子がおかしくて、キヤツ、キヤツと、大笑いした。そのとき突然、伸ちゃんと私は結婚したんだ、という実感がドツと湧いた。本当にドツという感じだった。不思議だ。今朝は、いくらそう思おうとしても信じられなかったのに。

その夜、私は先にベッドに入っていた。大きな行事を無事に終えたあとの安堵感と、快い疲労感にあやされてぼうつとしていたと思う。伸ちゃんがやってきて、顔を寄せるようにしてこう言った。

「ひとみ、ありがとう」

私には伸ちゃんの言葉の意味がのみこめなかった。

「何が？」

「結婚してくれて、ありがとう」

一瞬、ぎゅっと胸が絞られるように感じた。うれしかった。ありがとうを言わなく